



中国人留学生のSPIにおける困難点 : SPI模擬試験結果から

金, 晶晶

(Citation)

国際文化学, 31:65-85

(Issue Date)

2018-03-20

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010138>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010138>



中国人留学生の SPI における困難点

—SPI 模擬試験結果から

Difficult Problem for Chinese International Students in SPI :

Focus on a SPI Simulation Test

金 晶晶

KIN Syosyo

Summary

The purpose of this paper is to discover why Chinese international students have trouble in seeking employments in Japan. This paper focused on the pre-employment stage using the synthetic personality inventory (SPI) simulation test with 20 Chinese students studying in Japan.

After conducting the SPI, the author focused on the incorrect answers and discovered the categories that were most problematic. And then looked at questions with higher incorrect rate, compared these answers with the SPI correct answer to analyze why the participants made the mistakes.

On the test, everyone was able to answer all the language ability questions, but it was found that the number of incorrect answers varies depending on the category. Different questions in the same category also had different incorrect answers rate depending on the questions. Some influence from Chinese language can be considered. In the non-language ability questions, only 6 participants were able to answer all the questions within the time limit. Thus non-language ability questions are more difficult for international students than language ability questions. In the non-language ability questions, there is a problem in their reading of Japanese before doing the calculations and this also affects the logical thinking ability required. Regardless of whether language ability or non-language ability questions, it can be said that Japanese language ability affects the incorrect answers.

キーワード

中国人留学生、日本語能力、ビジネス日本語、就職前、SPI

I はじめに

2008年に文部科学省が策定した「留学生 30 万人計画」では、2020 年までに留学生を 30 万人に増やすという計画になっている。その影響も受け、日本学生支援機構の「平成 26 年度外国人留学生在籍状況調査結果」によると、日本にいる留学生の数は、東日本大震災の影響と考えられる平成 23、24 年の一時的な減少を除けば、増加の傾向にある。一方、経済のグローバル化が進むにつれて、日本の企業は海外で会社を設立したり、海外の会社と合併会社を作ったりすることが多くなっている。このような状況の中、留学の成果を日本での就職や日本企業への就職という形で実現したい、母国と日本の掛け橋になりたいと希望する留学生が増えている。同機構の「平成 25 年度私費外国人留学生生活実態調査」によると、日本で就職したいという学生は 65%を占めている。しかし、実際に就職できた留学生は就職希望留学生の 29.3%しかいない。つまり、就職希望者の 7 割もが実際には就職がかなわなかったことになる。

株式会社ディスコが行った「外国人留学生の採用に関する企業調査」（2013）によると、企業が在学中の留学生に対して積んでほしい学習・経験は、「ビジネスレベルの日本語」が 92.6%で最も多かった。公益財団法人日本漢字検定協会が行った「外国人留学生の受け入れ・進路状況と日本語教育に関する調査」（2011）では、大学で力を入れたい留学生サポートについて、現状と今後の計画を比較しており、今後の計画として、急激に増加したのは「ビジネス日本語教育」と「就職支援」の 2 つの項目である。留学生の日本語能力に関しては、授業に対応できるだけでなく、日本での就職活動や日本企業での就労においても対応できるレベルの高い日本語力を身に付けさせたいと考えていると言える。

II 先行研究

本節ではこれまで大学等で行われてきた「ビジネス日本語」と「ビジネス日本語教育」について先行研究の記述を取り上げ、留学生が日本での就職にあたって直面している問題を探る。

2.1 ビジネス日本語の定義

堀井(2008)では「仕事を遂行するために必要な日本語」、李(2002)では「ビジネス日本語とは日本語によりビジネス・コミュニケーションを行うもの」と定義している。これらの先行研究の定義は、「ビジネス日本語」が仕事の場面でのコミュニケーションのための日本語を指すという点では共通している。この定義に従えば、「ビジネス日本語教育」は「仕事の場面でのコミュニケーション」に特化した日本語教育になる。このように、従来のビジネス日本語教育は「就職後」を想定したものである。しかし、留学生の日本語での就職を考えた際、「就職前」の内容も含めたビジネス日本語の指導も必要と考えられる。本稿では「就職前」に注目し、留学生が就職の際に必要な日本語能力について検討する。

2.2 ビジネス日本語教育の現状

留学生の就職率が低い、就職状況が厳しいという現状の原因として、留学生が身につけている日本語あるいは必要だと思っている日本語と、ビジネスの場面で求められる日本語のレベルにギャップがあることが指摘されているが、留学生が就職前に大学等で受けている教育の内容も影響していると考えられる。では、大学でのビジネス日本語教育ではどのような指導がされているのだろうか。

公益財団法人日本漢字検定協会が行った「外国人学生のビジネス日本語教育に関する調査」(2012)では日本語教育振興協会に加盟の 350 の日本語学校を対象に調査を行っている。回答のあった 201 校のビジネス日本語教育に関する「現在の取り組みの有無と今後の意向について」調査した結果、「既にビジネス日本語教育を実施しており、今後も継続ないし強化したい」学校は 201 校のうち 42 校、「ビジネス日本語教育は実施していないが、今後は実施していきたい」とした日本語学校が 79 校あった。つまり、今後の実施や継続ないし強化の意思を示している学校は 121 校と、全体の 60%にのぼる。また設置しているビジネス日本語コースについて「半期ないし通年のビジネス日本語コースを常設している」を選んだのが半数を超えている。

橋本(2011)によれば、通常大学で行われている日本語教育は、日常生活に必要な基礎的な日本語力を身につけ、大学や大学院での勉強や研究が行えるように助けることが目的であり、「アカデミックジャパニーズ」¹⁾と呼ばれる日本語教育が行われているという。また、大学で行われている日本語教育とビジネス日本語教育で求められている日本語を比較し、その結果、ビジネス場面で必要な言語的な要素やスキルはアカデミックジャパニーズと共通しているが、ビジネス場面で必要となる文化的要素はアカデミックジャパニーズではカバーできないという。アカデミックジャパニーズでカバーできるものは用い、ビジネス場面に特有なスキルや項目は具体的に教えて行くのが「ビジネス日本語教育」ということになるだろうと述べている。

堀井(2013)では、ビジネス日本語は 2007 年のアジア人材資金構想において「ビジネス日本語」教育が導入されることによって注目されるようになったが、それに関する体系的な研究と教育実践はまだ少ないと述べてられている。そして、大学における日本語教育では講義をより深く聞き、レポート・論文を書くことを目的としたアカデミックジャパニーズ教育が浸透し、これを担当する日本語教員が増えたところではあるが、留学生の就職支援のためのビジネス日本語教育に手掛け、実施している大学や日本語教員はまだ少ないと述べられている。神崎他(2011)でも、これまで大学で行われてきた日本語教育はアカデミックジャパニーズであり、それは「ビジネス日本語」と異なるものだとして指摘されている。

ビジネス日本語教育が行われている場合についても問題が指摘されている。池田(2009)によると、日本企業は留学生に対して高度なビジネス日本語を求めており、大学においても「ビジネス日本語教育」と「ビジネス日本語マナー教育」が必要だという声が上がっているものの、現在のビジネス日本語教育で教えられているものは、留学生が入社後に必要となる日本語であり、就職試験を突破し、入社できるための日本語教育はほとんどされておらず、本当に実践的で、有用なのかも明確ではないのが現状であると指摘している。また、袴田(2009)でも、2000 年以降、「就職活動中、就職後に必要な日本語能力・技能」が

「ビジネス日本語」として認識されるようになり、様々な教材が出版されているものの、その多くが「就職後」を想定しており、留学生が日本で就職活動をする際に必要な情報を掲載している教材は少ないと指摘している。そして、日本企業への就職を希望する留学生には、日本語教育において、就職後に活用できるビジネス日本語と同時に就職活動に直結した内容も必要であると主張している。

以上の先行研究の指摘から、留学生が日本で就職するに当たっては、アカデミックジャパン教育だけでは不足、ビジネス日本語教育も必要とされているものの、現在のビジネス日本語教育は「就職後」を想定したものであり、「就職前」の日本語教育になっていないことが確認された。しかし、留学生の日本での就職を考えた時、「就職後」だけではなく「就職前」の日本語も必要ではないだろうか。そのため、本稿ではビジネス日本語を「就職前」と「就職後」に分けて考え、「就職前」の部分に注目する。本稿での「就職前」は就職活動を始めてから実際に就職が決まるまでの段階を指す。日本企業が留学生の就職の際にどの程度の日本語能力を要求しているのか、就職できるための日本語とは一体何かを明らかにすることができれば、今後の留学生の就職活動に役立つだけでなく、これから大学でビジネス日本語教育を実施する際の参考にもなるであろう。

2.3 留学生が就職するのに直面している問題点

アジア人材資金構想プロジェクトサポートセンター(2011)によれば、2009年頃から留学生の採用数が増え、日本人学生と別枠で採用し、優秀な留学生を正當に評価しようと、様々な新しい採用手法を取る会社も増えているが、現段階ではやはり日本人学生と同じプロセスで採用している会社が最も多いという。経済産業省委託調査(2015)によれば、留学生の採用方法については「日本人学生と区別なく採用している」会社が全体の7割を占め、英語による採用や選考を実施している会社はわずか1割しかない。企業も留学生に対して、高度な日本語力を求めていると言える。そして、同調査の企業側に対するアンケート調査結果からは、企業が留学生に高い日本語能力を求めているのに対し、留学生の能力はその期待に達していないということがうかがえる。また、採用時のポイントとして挙げられたもののうち、面接とともに語学力(日本語)が他の専門性やSPI²⁾等の筆記試験などの項目に比べて、圧倒的に多かったという。

どのような職種に就くにしても日本企業へ就職の流れは、日本人と同じく複数のステップを踏まなければならない。企業によって採用選考の流れは異なるが、福沢(2010)によると大抵の企業は、「プレエントリー、エントリー、説明会やセミナーの参加、エントリーシートの提出、筆記試験及び性格適正試験など、面接(エントリーシートを基に行われる)、内定」の流れになっているという。

神谷(2010)では留学生は就職の段階で、就職試験の準備、自己分析、エントリーシートの書き方などに困難を感じており、自己分析の仕方やエントリーシートにどのように自己表現したらいいかが分からないと述べている。つまり、留学生自身は面接に至るまでの段階で困難に直面しているというのである。しかし、留学生にとって実際にどの段階が難しいのかはまだ明らかにされていない。留学生に必要なビジネス日本語能力と言うと、面接でうまく対応でき、内定を獲得できるコミュニケーション能力を想像しがちだが、ユーキ

キャン就職試験研究会(2015)では、採用試験のプロセスの中の大きな分岐点は、筆記試験を突破して、面接に進めるかであると述べている。これは留学生も同じであると考えられる。

ユーキャン就職試験研究会(2015)によると、SPI は年間で 11,000 社に用いられ、採用試験と言えば SPI というほど選抜の基準設定や採用後の配属・配置などで参考にされており、トップシェアを誇るという。独立行政法人日本学生支援機構(2015)も、日本企業の中で SPI を使用しているところが最も多いと述べている。これらの記述から筆記試験における SPI の重要性がうかがえる。しかし、古本(2010)によると、SPI は日本人用の試験であり、内容的には日本語だけではなく、日本文化などの常識に関する知識も必要なため、留学生にとって非常に難しい問題であるという。『ユーキャンの SPI3 問題集』によると、SPI は短い時間にたくさんの問題を解かせることで、作業の処理能力を図るものである。能力適正検査と性格適正検査の二つの検査が含まれ、能力適正検査には言語能力問題と非言語能力問題の二つが含まれている。言語能力問題は日本語能力を測るものである。非言語能力問題は一見日本語能力と関係なさそうに見えるが、短時間で問題文の日本語を正しく理解し、文の情報を読み取り、適切な式を立てないと正しく解答できないため、留学生にとっては難しいことが予想される。重田・中原(2017)は SPI の言語能力問題を用いて、日本人学生と中国人留学生を対象に調査を行った。その結果、日本人学生が中国人留学生より正答率が高いことが明らかになり、中国人留学生のほうが問題を解くのに時間がかかることがわかった。

以上の先行研究の指摘から、留学生が日本企業への就職に当たって、まず直面する大きな問題の一つとして、筆記試験における SPI の難しさが考えられる。これは現在大学で行われている「就職後」を想定したビジネス日本語教育では指導されていない部分でもある。その難しさを明らかにすることはビジネス日本語教育のあり方を再検討するためにも必要なプロセスであると考えられる。

III 研究目的と方法

3.1 研究目的

本研究では留学生が日本に就職するためにどのような日本語能力が必要かという視点から、SPI の能力適性検査に着目する。SPI のどのような問題が留学生にとって難しいかを明らかにし、就職に必要な日本語能力を検討することを目的とする。

3.2 調査協力者

日本企業への就職を目指す留学生に必要とされている日本語を明らかにするため、調査対象を調査時の 2016 年度に日本で就職活動を行っていた、または既に内々定を得ていた在学生に限定し、出身地や所属に関係なく協力者を探した。結果的に協力者 20 名は全員神戸大学大学院の修士二年生となった。全員中国出身であり、既に日本語能力試験 N1 に合格していた。下記表 1 では協力者の日本語能力試験 N1 の得点、SPI の対策をしたかどうか及び専門領域の文系か理系かの内訳を示す。

表 1 協力者の内訳

協力者	日本語能力の高低	SPI対策の有無	文理の差
A	N 1 (171)	有	文
B	N 1 (130)	有	文
C	N 1 (133)	無	理
D	N 1 (115)	有	文
E	N 1 (134)	無	理
F	N 1 (113)	無	理
G	N 1 (107)	有	文
H	N 1 (168)	有	文
I	N 1 (157)	有	理
J	N 1 (124)	無	文
K	N 1 (180)	有	理
L	N 1 (102)	有	理
M	N 1 (135)	無	理
N	N 1 (119)	有	理
O	N 1 (153)	有	理
P	N 1 (121)	有	理
Q	N 1 (133)	無	理
R	N 1 (122)	有	文
S	N 1 (139)	有	理
T	1 級 (347)	有	文

3.3 研究方法

本研究では、SPI の模擬試験を実施し、その解答状況から留学生にとっての困難点を探る。模擬試験結果の分析の参考にするため、試験後に半構造化インタビューを行い、協力者の就職状況や就職活動に対する意識も合わせて調査する。

3.3.1 SPI 模擬試験の実施方法

協力者に予め調査の主旨を説明し、承諾を得た上で、SPI 模擬試験を実施した。問題は『ユーキャンの SPI3 問題集(2017 年度版)』³⁾ (以下『SPI3』と称す)掲載の模擬試験問題のうち、言語能力問題と非言語能力問題部分を抜粋したものを用いた。『SPI3』の記述に基づき、以下では表 2 に言語能力問題の出題カテゴリーを示し、表 3 に非言語能力問題の出題カテゴリーを示す。

言語能力部分は表 2 に示しているように、主にいわゆる「国語問題」である。二語の関係、語句の意味、ことわざ・慣用句、敬語、文法、空欄補充、文の並べ替えと長文読解の 8 つのカテゴリーを含む 40 問で構成されており、解答制限時間は 30 分である。『SPI3』によればこれらの問題によって、対人折衝に必要となる意思伝達能力や文章作成能力など判断しているという。

表 2 言語能力部分の出題内容

問題番号	カテゴリー	内 容
1～7	二語の関係	二つの語句の関係性を見定める問題。
8～15	語句の意味	熟語や四字熟語の意味を問う問題。
16～21	ことわざ・慣用句	ことわざ・慣用句の知識を問う問題。
22～25	敬 語	動作の主体が相手なら「尊敬語」、自分や身内なら「謙譲語」を使い分ける問題。
26～29	文 法	助詞・助動詞の用法と意味の違いを正確に判別する問題。
30～35	空欄補充	文中の空欄に語句を補充する問題。接続語の補充とキーワードの補充の 2 種類がある。
36、37	文の並べ替え	幾つかの文を適切な順番に並べ直す問題。
38～40	長文読解	まとまった長さの文章を読んで設問に答える問題。

非言語能力部分の問題は表 3 に示している通り、数学分野と理科分野から出題されている。損益算、代金の支払い、速さ・時間・距離、通過算・流水算、仕事算、濃度算、年齢算、鶴亀算、推論、論証、位置と方位、集合、順列と組み合わせ、確率、表の読み取り、グラフ領域、物の流れと比率、ブラックボックス、図形問題、展開図の 20 のカテゴリーを含む 30 問で構成されており、解答制限時間は 40 分である。『SPI3』によれば、これらの問題によって企業での業務に必要なデータ処理や在庫管理など言語能力以外の実務処理能力を検査しているという。

表 3 非言語能力部分の出題内容

問題番号	カテゴリー	内 容
1、2	損益算	原価、低下、利益などを計算する問題。
3	代金の支払い	代金の精算や割引等の問題。
4、5	速さ・時間・距離	速さ・時間・距離の関係を計算する問題。
6	通過算・流水算	どちらも速度算の一種。
7、8	仕事算	ある仕事にかかる日数や時間を求める問題。
9、10	濃度算	「溶けているものの重さ」と「水溶液」の重さを計算する問題
11	年齢算	「親の年齢が子の年齢のn倍になるのは何年後か」がパターン問題。
12	鶴亀算	鶴と亀の総数と足の総本数から、それぞれの個体数を求める問題。
13、14	推論	与えられた情報から、必ず正しいと言える発言を選ぶ問題。
15	論証	「AならBである」という命題から、正しい事象を選ぶ問題。
16	位置と方位	与えられた条件をもとに移動した位置や方位を求める問題。
17、18	集合	あるグループの中で、与えられた条件に合う人数や数量を求める問題
19	順列と組み合わせ	選んで並ぶ順列問題と選ぶだけのくみあわせ問題。
20、21	確率	全体的場合の数と求める場合の数の割合を計算する問題。
22、23	表の読み取り	得点分布表や表内の数値の空欄補充の問題。
24、25	グラフ領域	求める条件に当てはまるグラフの範囲を選ぶ問題。
26、27	物の流れと比率	物の流れとその割合を計算する問題。
28	ブラックボックス	変化の規則を見つけ出し、それに従って処理できるかを問う問題。
29	図形問題	図形の公式を使って、辺の長さや面積を求める問題。
30	展開図	展開図を組み立てたとき、リボンを十字にかけた面が向かい合い、リボンの通る直線が繋がるものを選ぶ問題。

SPI 模擬試験はプライバシーの保護及び他者の影響を排除するため、すべて個別に行った。問題はコピーした物を紙媒体で渡し、答えは直接問題用紙に記してもらった。また、日本語能力確認のため、問題文を読んで意味が分からないものがあった場合には、その問題に印をつけておくよう依頼した⁴⁾。

模擬試験終了後、問題用紙を回収し、後日インタビュー調査を行うことを確認して終了した。その後、調査者が『SPI3』付属の解説・解答をもとに協力者の解答の正誤を確認した。

3.3.2 インタビュー調査の実施方法

協力者の就職活動状況や就職活動に対する意識を知り、SPI 模擬試験結果の分析の参考にするため、模擬試験実施時にこれらの点についてたずね、調査票に解答してもらった。模擬試験採点後にまた協力者に会い、予め記入してもらった調査票に基づき半構造化インタビューを行った。

調査票の解答に基づき、必要に応じて詳細な説明を求めた。また、SPI 模擬試験の結果を示したうえで、受験時に感じた困難点などを確認した。しかし、実際に模擬試験をフォローできる質問が少なかったため、協力者の間違えた原因を分析する際に、補助的に使うことにする。インタビューでの質問項目を稿末の資料 1 で添付する。

3.4 資料と分析方法

主たる資料として SPI 模擬試験で得られた協力者の解答を用いる。また、分析・考察にあたっては、調査票及びインタビューの文字化データで得られた知見も活用する。

分析方法としてまず、SPI 模擬試験解答について模擬試験終了後に問題兼解答用紙を回収し、上掲書付属の解答・解説をもとに正誤を確認した。そして、言語能力問題と非言語能力問題に分けてそれぞれの解答状況をまとめ、問題ごと及び協力者ごとの誤答率を算出し、誤答率の高かったものを中心にその要因を分析した。

IV 調査結果

まず、4.1 節で言語能力部分の調査結果を示し、誤答率の高いものを中心に協力者の誤答の原因を分析する。誤答の原因を分析する際には、協力者の母語である中国語の影響も考慮に入れる。そして、4.2 節では非言語能力部分の結果を示し、誤答率の高いものを中心に協力者の誤答の原因を分析する。その際、『SPI3』付属の解説・解答を参照しながら困難点を探り、どのような要因が誤答に関わっているかを分析する。

4.1 言語能力部分の調査結果

まず、4.1.1 で協力者の言語能力部分の解答状況を示し、誤答の傾向について述べる。そして、4.1.2 では誤答率の高かった問題を中心にその要因について分析を行う。

4.1.1 言語能力部分の解答状況

20 名の協力者の解答状況を表 3 にまとめた。縦軸に問題番号、横軸に協力者を A～T のアルファベットで示す。協力者が誤った問題の欄に「×」を付けて表し、空白の部分は正答

を表す。表の右端に示した「誤答数」は当該の問題の誤答者数であり、「誤答率」は誤答数を協力者数の合計 20 で割った百分率を示す。「カテゴリー」は各問題が出題されたカテゴリーを表す。下段の「各協力者の誤答数」は 40 問のうち各協力者が間違えた数の合計であり、「各協力者の誤答率」は各協力者の誤答数合計を問題数 40 で割って算出したものである。

この部分では協力者 20 名が解答時間内にすべての問題に解答できていた。表 4 を見ると、カテゴリーによって誤答数が違うことが分かる。「空欄補充」の部分は 20 名全員が正しく解答できている。また、「二語の関係」、「敬語」と「長文読解」は誤答率が 40% 未満となっている。しかし、他のカテゴリーでは、同じカテゴリーでも問題によって誤答率が大きく異なっている。「ことわざ・慣用句」の部分では 6 問中 3 問の誤答率は 15% から 25% だが、残りの 3 問の誤答率は 70% から 80% に至っている。「語句の意味」の部分では、問題 12 と 15 の誤答率が 0% であるのに対し、問題 9 の誤答率は 80% に達している。また、協力者一人ひとりの解答状況を見ると、誤答率がわずかに 10% の D のような協力者がいる一方で、誤答率が 48% に達する F のような協力者もいた。個人差がかなり大きいこともうかがえる。『SPI3』には学生への助言として、この部分では高得点はもちろん、出来れば満点を目指すべきだと書かれているが、協力者たちは必ずしも高得点を得ているわけではなく、満点を取れた者は一人もいなかった。

表 4 言語能力部分の解答状況

問題	協力者	カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	誤答数	誤答率(%)	
1	二語の関係				X								X	X	X		X						5	25	
2								X						X		X							5	25	
3																							0	0	
4															X	X			X			X	4	20	
5																							0	0	
6							X	X			X	X	X		X	X							X	8	40
7												X												1	5
8	語句の意味	X					X	X				X		X		X		X		X			8	40	
9			X			X	X	X	X	X	X	X		X				X	X	X	X	X	16	80	
10			X				X	X		X		X	X						X	X	X	X	11	55	
11																				X			1	5	
12																							0	0	
13								X				X						X					3	15	
14								X	X														2	10	
15	ことわざ 慣用句																						0	0	
16		X	X				X	X	X	X		X	X	X	X		X	X	X		X		15	75	
17								X			X		X	X	X	X							5	25	
18		X	X	X			X	X	X	X	X	X	X	X	X	X	X				X		14	70	
19		X	X	X	X		X	X	X		X			X	X	X	X				X	X	X	16	80
20								X										X			X		3	15	
21								X							X				X				3	15	
22	敬語	X					X								X	X	X	X					6	30	
23			X				X																2	10	
24							X						X		X			X	X		X		7	35	
25		X					X	X		X		X			X			X					7	35	
26	文法	X					X	X	X	X				X	X			X	X	X			10	50	
27					X	X					X				X		X			X			6	30	
28															X								1	5	
29		X																				X	2	10	
30	空欄 補充																						0	0	
31																							0	0	
32																							0	0	
33																							0	0	
34																							0	0	
35																							0	0	
36	文の並べ 替え	X			X			X	X			X	X	X			X	X		X	X	X	13	65	
37		X				X	X					X	X									X	7	35	
38	長文読解													X	X								2	10	
39										X			X			X	X						5	25	
40				X	X									X	X			X			X		X	7	35
各協力者の誤答数			11	6	6	4	11	19	8	9	6	12	8	15	16	8	10	14	6	10	9	7			
各協力者の誤答率(%)			28	15	15	10	28	48	20	23	15	30	20	38	40	20	25	35	15	25	23	18			

4.1.2 言語能力部分の誤答率が高い問題と誤答の要因

4.1.1 でも述べたように、カテゴリーによって誤答率が大きく異なるが、この部分では、同一カテゴリーの中で問題により誤答率が大きく異なっていたものを見ていく。「語句の意味」と「ことわざ・慣用句」の部分では誤答率が 80%や 75%に至った問題がある。しかし、この二つのカテゴリーの中でも問題によって、誤答率が 0%のものもあれば、誤答率が 80%のものもあった。このような差が生じた原因について出題されている問題を確認し、問題の正答と協力者の解答を比較しつつ、誤答の原因を分析する。その際、協力者が中国語母語話者であることも考慮に入れる。以下ではカテゴリー名には 下線 を付し、問題を 四角い枠 で囲って示す。

(1) 語句の意味：

問題 8～15 の 8 問は語句の意味を問う問題である。問題の内容から二字熟語、四字熟語、漢語動詞及び漢語形容詞の三つのタイプに分けられる。『SPI3』では学生向けの助言としてこのカテゴリーでは知っているかどうかで得点差がつきやすいので、日頃から語彙力を身につけるべきだろうと記されている。

表 5 に問題別の誤答数とその内訳を示す。同じカテゴリーに含まれていても、問題によって誤答数が違う。他のカテゴリーに比べて誤答数の差が大きい。問題 9 のように 20 名のうち 16 名も間違えた問題もあれば、問題 12 と問題 15 のように全員正しく解答できた問題もある。

表 5 「語句の意味」の誤答状況

問題番号	問題のタイプ	正答	誤答者数 (人)	誤答の内訳				
				A	B	C	D	E
8	二字熟語	D	8	8				
9		C	16	12	2		2	
10		E	11	8	3			
11	四字熟語	A	1			1		
12		E	0					
13	漢語動詞及び 漢語形容詞	D	3	2	1			
14		C	2				2	
15		A	0					

以下では誤答数が 16 人と最も多い二字熟語の問題 9 について、誤答数が 0 人と最も少ない四字熟語の問題 12 と比較しながら分析する。

問題 9

思った通りになって満足なこと

A 納得 B 得心 C 会心 D 充実 E 陶醉

問題 9 では C の「会心」が正しい答えであるが、16 名が誤ったものを選び、そのうち 12 名は A の「納得」を選んでいいる。協力者は「思ったとおりになって」という部分から「納得」を選んでいいると考えられる。他の選択肢にもぴたり合うものが見つからなかったため、部分的にでも正しいと考えられるものを選んだと考えられる。B から E は中国語でも用いられるが、正解の C「会心」の中国語の意味は出題された意味ではなく、相手の意図を理解したというのが第一義である。このため、「会心」を正答と思わず、消去法的に A を選んだと考えられる。

問題 12

他人を無視して、自分の思うままにふるまうこと

A 前人未踏 B 天衣無縫 C 千差万別 D 正真正銘 E 傍若無人

一方、問題 12 では E「傍若無人」が正しい答えであり、全員正しく答えている。二字熟語は、日中両言語に存在する場合、意味が重なるものもあれば、異なるものもある。一方、四字熟語は基本的に中国語に由来し、中国の昔話から作られたものが多いため、意味は日中両言語ではほぼ同様である。A から E の四字熟語はいずれも中国語でもほぼ同じ意味で用いられている。そのため、協力者は中国語の意味をそのまま日本語に転移させ、正しく答えられたと考えられる。

(2) ことわざ・慣用句：

問題 16～21 はことわざや慣用句などの知識を問う問題である。『SPI3』では、よく聞くことわざや慣用句は、正確に意味を答えられるように暗記するのもいいと勧めている。表 6 に問題別の誤答数とその内訳を示す。この部分でも 20 名のうち 15 名前後が誤った誤答数が多い問題もあれば(問題 16、18、19)、誤答数が少なかった問題もあった(問題 20 と 21)。同じことわざの知識を問う問題であっても、問題 16 の誤答数は 15 名、問題 17 の誤答数は 5 名と大きな違いがある。

表 6 「ことわざ・慣用句」の意味の誤答状況

問題番号	問題のタイプ	正答	誤答者数(人)	誤答の内訳				
				A	B	C	D	E
16	ことわざの意味	A	15		7	4	4	
17		D	5			3		2
18	慣用句の意味	C	14		3		2	9
19		A	16		1	5		10
20	故事成語の意味	B	3	1		2		
21		D	3		1			2

問題の内容から①ことわざの意味、②慣用句の意味、③故事成語の意味の三つのタイプに分けられる。以下ではこのタイプ別に誤答の要因を探るが、比較のため誤答が少ない故事成語についてもその要因を検討する。誤答数が 15 人と 16 人である、問題 16 と問題 19、そして誤答数が 3 人のみである問題 20 を例として説明したい。

① ことわざの意味

ことわざ全体の意味は、必ずしもその中に含まれる個々の単語の意味の組み合わせから分からないため、そのことわざ自体を知っているかどうか为正誤に大きく関わる。

問題 16

よどみなく話すことのたとえ

- A 立て板に水 B 一を聞いて十を知る C 立つ鳥あとを濁さず
D 目から鼻へ抜ける E 河童の川流れ

この問題では 20 名中 15 名が誤答し、そのうち 7 名が B を選んでいる。これらの協力者は恐らく、そもそも問題文の「よどみなく」という語彙や正解の A「立て板に水」を知らなかった可能性がある。多くの協力者が B を選んだのは、問題文の「話す」という部分から、言葉や話に関わる表現であると類推し、消去法的に考えたためだと思われる。

② 慣用句の意味

ことわざと同様、句全体で表される意味は各構成要素の意味の組み合わせとは必ずしも一致しないため、その慣用句を知っているかどうかは鍵となる。

問題 19

その場にるのが恥ずかしくて、気まずい様子

- A ばつが悪い B 意表をつく C 息をのむ
D 引導を渡す E 頭隠して尻隠さず

正しい答えは A だが、協力者 20 名のうち 16 名が間違っている。そのうち 10 名が選択肢 E を選んでいる。これも問題 18 と同様に選択肢の慣用句に馴染みがなかったため、選択肢に含まれる個々の単語から意味を類推したと考えられる。E が多かったのは「恥ずかしく気まずい様子」から顔を隠したくなると類推したためではないかと考えられる。

③ 故事成語の意味

故事成語は主に中国の古典に書かれた故事が元になっている。このことがこのタイプの問題での誤答の少なさに関わっていると考えられる。

問題 20

仲の悪い者同士が、同じ場所や境遇に居合わせること

- A 四面楚歌 B 呉越同舟 C 五十歩百歩 D 漁夫の利 E 疑心暗鬼

この問題の正答は B「呉越同舟」で、誤答したのは 20 名のうち 3 名のみであった。故事成語は中国の昔話に由来し、日本語と中国語で意味の違いはほとんどない。そのため、中国語からの正の転移により正しく答えられたのであろう。

このように、問題ごとに見た場合、相対的に「語句の意味」や「ことわざ・慣用句」などのカテゴリーで特に誤答が多かった。「語句の意味」では二字熟語、四字熟語と漢語動詞及び漢語形容詞の知識を問う問題が出題され、協力者は漢字の知識があるため有利であると考えられるが結果から見ると、必ずしもそうではなかった。四字熟語と漢語動詞及び漢語形容詞の問題では誤答が少なかったが、二字熟語の問題では、漢字の知識があるにも関わらず、誤答が多かった。その原因として問題に、中国語にはなく日本語授業でも習わない漢語が含まれていること、同じ漢語でも日中で意味が異なることが挙げられる。さらに、二字熟語の選択肢には他の 2 つに比べて類義語が多く含まれ、選択するのに紛らわしかったことも考えられる。

「ことわざ・慣用句」の問題では、中国語の昔話に由来している故事成語の意味を判断する問題の誤答は少なかったが、ことわざ・慣用句は誤答が多かった。これらはことわざ・慣用句を構成する一語一語の意味からは全体の意味が必ずしも類推できないことがあるため、誤答したと考えられる。

4.2 非言語能力部分の調査結果

非言語能力部分についてもまず、4.2.1 で協力者の解答状況を示し、誤答の傾向を示す。そして、4.2.2 では誤答率の高かった問題を中心にどのような要因が誤答に影響しているかを分析する。

4.2.1 非言語能力部分の解答状況

この部分で出題されるのは言語能力部分に見られるような知識そのものを問う問題ではなく、単純な計算問題でもない。一つの問題を解くのに、文章形式で出題される問題の意図を読み取り理解した上で、複数段階の計算を経てはじめて正しい答えに辿り着けるような問題である。また、言語能力の部分では、一つの問題に対し A～E の 5 つの選択肢から一つを選択するようになっているのだが、非言語能力の部分では A～J までの 10 の選択肢があり、その中から一つ選択するようになっているため、正しい答えを選べる確率そのものが低いと考えられる。最後の選択肢 J は、「A から I のいずれでもない」となっており、選択肢から自身の答えがありうるものかどうかを確認することもできない。さらに、この選択肢 J 以外の選択肢は数値が近いものも多く、ちょっとした計算ミスで誤った選択肢を選んでしまう可能性もある。また、位置や方位を求める問題や展開図などの問題で空間的な思考力も必要となっている。以上の要素から考えると、非言語能力の部分は言語能力部分と比べて、非常に難しくなっていると考えられる。

この部分では論理的な思考力と数的な処理能力が必要とされているのだが、問題量の割には制限時間が短く、かなりのスピードで解答しなければならないため、時間の余裕はあまりない。そのため、いかに速く、正確に解答できるかが結果を大きく左右するとされている。留学生にとってはまず、問題文を正しく読み取れるかどうか SPI の試験の成否に影響すると考えられる。古本(2010)でも、問題文の日本語が分からない場合は解くことができないと述べられている。また、問題文を理解できるとしても、文章題の日本語を一語ずつ分析して意味を理解しているようでは、要求されているスピードで解くことができないとも指摘されている。今回の調査結果からも非言語能力部分の難しさがうかがえた。

非言語能力部分の解答状況を表 7 で示す。この部分では言語能力部分と違って、全員が制限時間内にすべて解答できたわけではなく、未解答が多かったため、表 7 では未解答の問題に網掛けを施して示している。言語能力部分と同様に「×」は誤答を表し、空白は正答を表す。20 名の協力者を示すアルファベットの横に「解答人数」の欄を設けている。これは制限時間内に解答できた人数である。「誤答数」は解答できた者のうち、不正解だった協力者数である。右端の「誤答率」は、誤答数をその問題の「解答人数」で割った百分率である。下段の「各協力者の解答数」は当該の協力者が制限時間内に解答できた問題数を表し、「各協力者の解答率」は解答数を全問題数 30 で割って算出している。なお、「各協力者の正答数」は協力者が正しく答えられた問題数であり、「各協力者の正答率」は正答数を合計問題数 30 で割って算出している。表 7 に 20 名の協力者の非言語能力部分の解答状況をまとめる。表 7 からわかるように、解答率が 100% になっているのはわずか 6 名のみである。つまり、制限時間内に全て解答できたのは 20 名のうち 6 名のみということになる。言い換えれば、20 名の協力者のうち 3 分の 2 以上が時間内に解答できなかったことになる。その大きな原因として、先にも述べたように時間の不足が考えられる。また、時間内に全てに解答できた協力者 6 名の解答結果を見ると、必ずしも正答ばかりではない。協力者 K と S は誤答がそれぞれ 4 問と 10 問と 3 分の 1 以内であったが、他の 4 名はそれぞれ 19 問、21 問、22 問と 26 問と誤答が半数を大幅に超えていた。一方、制限時間内に解答できた問題は少ないものの、解答したものだけ見れば誤答数が少なかった協力者 A のようなケースもある。これは丁寧に問題を読んだためと考えられる。制限時間内に解答できた問題数も少なく誤答数も多い、協力者 F のような例もあった。誤答が多い原因は時間不足だけではなく、個人の言語能力や論理的思考能力なども影響していることがうかがえる。全問題に対する正答率が 50% 以上の協力者は 20 名のうち 5 名のみである。すなわち、7 割強の協力者はこの非言語能力部分では困難を感じていたと考えられる。

表 7 非言語能力部分の解答状況

問題	協力者	カテゴリー	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	解答人数	誤答数	誤答率(%)
1	損益算							×											×				20	2	10
2					×		×	×	×			×			×	×				×		×	20	8	40
3	代金の支払い			×		×	×	×				×	×	×	×	×	×	×		×	×	×	20	14	70
4				×			×	×	×			×			×	×				×	×	×	20	9	45
5	速さ・時間・距離						×					×		×				×				×	20	6	30
6								×				×	×		×	×	×	×	×			×	20	7	35
7	仕事算				×		×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	20	11	55
8							×	×	×		×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	20	10	50
9	濃度算			×		×		×	×							×				×			20	6	30
10								×			×			×					×	×		×	20	6	30
11	年齢算					×													×		×	×	20	4	20
12												×	×								×			20	3
13	鶴亀算		×								×	×		×	×				×	×	×		20	9	45
14				×		×	×	×				×			×				×			×	19	8	42
15	論証			×			×	×				×		×	×								19	6	32
16			×	×	×	×				×	×	×	×	×		×	×						16	11	69
17	位置と方位			×								×		×									16	5	31
18				×		×					×	×	×	×		×	×					×	×	12	10
19	集合			×							×	×		×	×	×					×	×	12	6	50
20				×	×						×	×	×	×	×							×	×	11	10
21	確率			×	×					×	×	×	×	×	×							×	11	8	73
22				×							×	×	×	×	×		×				×	×	11	10	91
23	表の読み取り											×		×	×				×				11	4	36
24				×	×						×	×	×	×	×		×					×	11	9	82
25	グラフ領域			×								×		×	×								8	5	63
26						×						×		×	×							×	8	5	63
27	物の流れと比率											×		×	×							×	7	4	57
28												×		×	×						×	×	6	5	83
29	ブラックボックス											×		×	×						×	×	6	3	50
30												×		×	×								6	5	83
30	展開図											×	×		×							×	×		
			17	27	26	16	17	15	15	24	24	30	30	30	30	19	24	15	16	13	30	30			
			57	90	87	53	57	50	50	80	80	100	100	100	100	63	80	50	53	43	100	100			
			15	14	19	11	13	4	11	14	13	4	26	9	11	9	18	8	9	4	20	8			
			50	47	63	37	43	13	37	47	43	13	87	30	37	30	60	27	30	13	67	27			

4.2.2 非言語能力部分の誤答率が高い問題と誤答の要因

具体的にどのような問題が留学生にとって難しいのだろうか。未解答のものは時間不足が原因と考えられるため、以下では未解答のものはいったん分析の対象から外し、20名の協力者全員が解答している問題にしぼって、分析を試みる。20名の協力者全員解答している問題はわずか13問である。この13問の中でも、カテゴリーによって誤答数がかなり異なる。その中で特に誤答数が多い問題は「代金の支払い」、「仕事算」の問題であり、過半数の協力者が間違えている。以下では、「代金の支払い」の問題3と「仕事算」の問題7を例として実際の模擬試験の問題と、付属の解答・解説書に記された解説を見ながら、問題の誤答状況とその原因を探る。誤答に一定の傾向が見られる場合についてはそれも参考に誤答の原因を検討する。以下ではまず問題のカテゴリー(下線を付して示す)とそのカテゴリーの内容や解くためのポイントなどを解説書に基づいて【】に入れて示す。そして、実際の問題と解説を四角い枠で囲って示す。そのあとに、各問題の解答状況について誤答を中心に確認した上で、出題に用いられた日本語の難易度、解答までのステップの複雑さなどの観点から誤答に関わる要因を探る。

(1) 代金の支払い

【代金の精算や割引などの問題であり、平均や割合を求める式をしっかりとマスターして、分割払いの問題では、基準にする量を「1」として割合を考えるようにする必要がある。】

問題 3

テレビを5回分割払いで購入することにし、一回目として総額の $\frac{1}{4}$ を支払った。2回目以降は均等に支払うことにすると、3回目を支払った時点で、残金は支払った金額のどれだけに当たるか。

A $\frac{3}{16}$

B $\frac{5}{16}$

C $\frac{3}{8}$

D $\frac{5}{8}$

E $\frac{8}{5}$

F $\frac{3}{5}$

G $\frac{5}{4}$

H $\frac{5}{3}$

I $\frac{8}{3}$

J AからIのいずれでもない

解説：

①支払い総額を1とすると、1回目を支払ったあとの残金は総額の

$$1 - \frac{1}{4} = \frac{3}{4}$$

②2回目以降の4回は均等に支払うことから、1回に支払う金額は総額の

$$\frac{3}{4} \div 4 = \frac{3}{16}$$

③3回目支払った時点で金額は総額の $\frac{1}{4} + \frac{3}{16} \times 2 = \frac{5}{8}$ ④残金は総額の $1 - \frac{5}{8} = \frac{3}{8}$ ⑤したがって、残金は支払った金額の $\frac{3}{8} \div \frac{5}{8} = \frac{3}{5}$

正答はFである。この問題では 20 名のうち 14 名が間違っていた。誤った 14 名のうち 6 名が C を選んでいる。ステップ④まで計算すると選択肢 C が得られることから誤答の原因は最後まで計算できていないことと考えられる。問題文では最後に「残金は支払った金額のどれだけにあたるか」を求めているのに、協力者は最後まで理解できなかったか、或いはケアレスミスで最後のステップを忘れてしまったと推察される。

(2) 仕事算

【ある仕事にかかる日数や時間を求める問題である。全体の仕事を 1 として方程式を作るのがポイントである。そして、「全体の仕事量＝単位時間あたりの仕事量×かかった時間」の公式を覚える必要がある。】

問題 7

M だけですと 8 時間かかる仕事がある。この仕事を M と N の 2 人ですることになり、最初に M だけが 3 時間したあと、残りを M と N の 2 人ですると合計で 6 時間かかった。この仕事を最初から最後まで N だけですと何時間かかるか。

- A 5 時間 B 6 時間 C 7 時間 D 8 時間
E 9 時間 F 10 時間 G 11 時間 H 12 時間
I 13 時間 J A から I のいずれでもない

解説：

①全体の仕事を 1 とすると、M が 1 時間にする仕事量は $\frac{1}{8}$

②M は 3 時間仕事したあとの残りの仕事量は $1 - \frac{1}{8} \times 3 = \frac{5}{8}$

③この仕事を 2 人で 3 時間かけて済ませたのだから、2 人で 1 時間にする
仕事量は $\frac{5}{8} \div 3 = \frac{5}{24}$

④N の 1 時間の仕事量は $\frac{5}{24} - \frac{1}{8} = \frac{1}{12}$

⑤N だけですとかかる時間は $1 \div \frac{1}{12} = 12$ 時間

問題 7 の正答は H である。【】内の解説ポイントにあるように「全体量を 1 として考える」ことができれば、正答を導くことは難しい。20 名のうち 11 名が誤り、そのうち 5 名が選択肢 J を選んでいる。問題文の「最初に M だけが 3 時間した後、残りを M と N の 2 人ですると合計で 6 時間かかった」の「6 時間」には M だけでかかった 3 時間も含まれているのだが、ある協力者はこれを M と N 2 人で作業した時間の合計ととらえていたことがインタビューにより明らかになった。M だけでした 3 時間を加えて全体では 9 時間と、全て M だけですよりも時間がかかったと考えたという。このように問題文の理解すら難しい協力者もいた。

非言語能力部分は言語能力部分と異なり、制限時間内に全ての問題に解答できた協力者がそもそも少なかった。また、全員が解答できた 13 問のみにしぼってみても、問題ごとの

誤答数は少なくなかった。特に「代金の支払い」や「仕事算」のカテゴリーでは 20 名の協力者のうち半数以上の人間違っていた。この二つのカテゴリーの問題では問題文の日本語の理解度が大きな要因として関わっていることが考えられる。模擬試験後のインタビューでは「問題文を読んで意図が分からなかったものはありますか」という質問に対し、ほとんどの協力者があまりないと答えていた。一方で正しく理解できるまでに時間がかかるという意見も得られた。日本語への理解がまだ不十分であるという自覚の乏しいことや、答えを出すまでに時間がかかることが分かる。多くの協力者が制限時間内に解答できなかったのも、日本語を読んで理解するスピードがまだ遅く、パターン化されているという非言語能力問題にもまだ慣れていないためだと考えられる。

V 考察

第 4 節では、日本で就職活動をしていた留学生 20 名を対象に行った SPI 模擬試験の結果を示し、誤答の傾向からその要因を分析した。本節では、この誤答の原因と考えられる点を整理したい。

まず、言語能力部分はいわゆる国語分野から 40 問が出題され、全員が制限時間内に解答していた。しかし、日本語能力試験 N1 を取得していた今回の協力者であっても、満点を取れた者はいなかった。問題は 8 つのカテゴリーから出題されており、その中で「語句の意味」や「ことわざ・慣用句」のカテゴリーで特に誤答率が高かった。「語句の意味」の問題で、与えられた意味を表す語句を選ぶもので、二字熟語、四字熟語と漢語動詞及び漢語形容詞を選ぶものが出題されていた。協力者は全て中国語母語話者であるため、これらの漢語を中心とした問題には有利であると思われたが、必ずしもそうではなく、二字熟語の誤答率は他の二つのカテゴリーに比べ明らかに高かった。その要因は、二字熟語には類義語が数多くあり紛らわしかったことや、中国語と日本語とで同形であっても意味が異なるものが含まれていることが影響していると考えられる。「ことわざ・慣用句」の問題では問題文の意味を表すことわざ、慣用句、故事成語を選ぶものが出題された。このうち故事成語は中国の昔話に由来するものが中心であったため誤答率が低かったが、ことわざと慣用句の誤答率は高かった。ことわざや慣用句の場合、その中に用いられている個々の単語の意味を組み合わせても必ずしも全体の意味を表すわけではないことが影響していると考えられる。実際に、協力者の誤答には、ことわざや慣用句に使われている一部の語句から意味を類推し、誤ったと思われるものがあつた。

非言語能力部分は言語能力部分と違って、制限時間の 40 分以内に全ての問題に答えられた協力者はそもそも少なく、6 名にとどまり、全員が答えていたのは 13 問のみであった。非言語能力部分のほうが、言語能力部分よりも留学生にとって難しいことがうかがえる。分析は、上記の 13 問にしばって行ったため、どの出題カテゴリーが最も難しいといったことは言えないが、解答できた問題の中では「代金の支払い」や「仕事算」のカテゴリーで協力者のうち半数以上が間違っていた。協力者の誤答からは、計算力、適切な公式の使用、単位の変換、論理的思考能力といった点のほか、問題文の理解に問題があることがうかがえた。重田・中原(2017)で既に明らかになったように、言語能力問題では日本人学生の正

答率が中国人留学生より高かった。このような傾向は非言語能力部分でも同じであろう。非言語能力部分で必要となる知識や技能以前に、日本語の読解能力に問題があることが考えられる。言語・非言語能力問題を問わず、日本語能力が誤答に影響を及ぼしているのである。協力者は全員日本語能力試験 N1 取得者であることから、単に N1 を取得したというだけでは不十分であると言える。

本研究では SPI 模擬試験後、日を改めて協力者に対してインタビューを行ったが、その中では、「問題を理解するのに時間がかかるものがある」といった声は聞かれたものの、「問題文を読んで意味が分からないものがあったか」という問いに対しては、ほとんどが「ない」と答えていた。このように、インタビューの結果から、協力者である留学生には、自分の日本語の知識や能力が不足しているという認識がないのではないかという懸念が生じる。実際に、非言語能力部分の「仕事算」の問題文について、疑問を感じながらも、自身の理解が誤っているとは思っていない例もあった。このような自身の日本語能力に対する認識の不足も、筆記試験の準備不足につながり、非言語能力問題の結果に影響を与えている可能性がある。

VI おわりに

本節では前節までの内容をまとめ、今後の課題を述べることで本稿の結論とする。

6.1 本稿のまとめ

本稿では日本への就職を目指す留学生に必要とされている日本語能力を明らかにするために、まず先行研究の知見を確認した。日本で就職活動している留学生の日本語能力と、採用側の企業が留学生に期待する能力に差があることがうかがえた。また現在大学で行われているアカデミックジャパニーズ中心の日本語教育では就職に対応できていないことや、ビジネス日本語教育が行われている場合も「就職後」の日本語指導が中心となっていることが確認された。これらの現状をふまえ本稿では就職活動における一連の流れの中で「分岐点」とされている筆記試験に着目し、その中でも多くの企業に採用され、古本(2010)が留学生にとって難しいと指摘している SPI 試験について、調査を行うこととした。

2016 年度に日本で就職活動を行っていた 20 名の留学生に対して SPI 模擬試験を行い、その解答状況から誤答の傾向やその要因を分析した。模擬試験の結果からは次のことが明らかとなった。

(1) 言語能力部分は、全員がすべて解答できていたが、「語句の意味」、「ことわざ・慣用句」のカテゴリーで誤答率が高かった。「語句の意味」は基本的に漢語を用いた語彙に関するものであったが、その中の二字熟語を問う問題で誤答率が極めて高かった。「ことわざ・慣用句」については、故事成語以外のことわざと慣用句で誤答率が高かった。

(2) 非言語能力部分は、制限時間内に解答できた者が少なく、6 名にとどまった。言語能力部分と比べて非言語能力部分のほうが、留学生にとって難しいと考えられる。全員が答えられた問題の誤答の傾向からは、計算力をはじめとする理系分野で必要とされる能力以前に、問題文の理解の点で問題があることがうかがえた。

これらの点から、言語・非言語を問わず、語彙の知識や読解力といった日本語能力の不

足が問題であることが確認できた。しかし、SPI 模擬試験実施後に行ったインタビューでは、協力者がこのことをあまり認識していないことがうかがえた。

以上の結果から、大学のビジネス日本語教育では、「就職後」ではなく、まず「就職する」ために必要な日本語として筆記試験対策を扱う必要があると考えられる。

6.2 今後の課題

本稿の結果は今後の大学におけるビジネス日本語教育のあり方を検討するにあたり、一定の貢献ができると考えられるものの、まだ不十分な点が残っている。最後に下記の点を今後の課題として挙げておく。

まず、今回の SPI 模擬試験では、非言語能力部分については、時間不足のため未解答部分が多くあった。このことから、制限時間内に非言語能力部分に解答するのは留学生にとって非常に困難であることは示せたものの、どのカテゴリーが難しいのかについては詳しい分析ができなかった。制限時間を設けずに全てに答えてもらい、困難点を探ることも必要である。これを行うことで、全問に答えるのにどのぐらいの時間がかかるかがわかり、協力者が自身の日本語能力を自覚するきっかけにもなると考えられる。

また、今回は SPI 試験のみ扱ったが、就職にはエントリーから内定までに一連の流れがあり、それぞれの段階で留学生特有の困難があることが考えられる。それぞれの過程における留学生が直面する課題を明らかにする必要がある。

以上の課題に取り組むことで、今後の大学におけるビジネス日本語教育のあり方を改善し、留学生の日本における就職率の向上に繋げることが、最終的な目標である。

（神戸大学国際文化学研究科博士後期課程学生）

注

¹⁾門倉(2006)では「アカデミック・ジャパニーズ」を大学で勉学に対応できる日本語能力と定義している。

²⁾「SPI」とは、synthetic personality inventory の略であり、株式会社リクルートキャリアが行っている就職試験の名称である。

³⁾2015年9月30日に出版されたものであり、本研究では244頁から261頁の内容を抜粋し、調査内容とした。

⁴⁾協力者には問題文を読んで意味が分からないものがあった場合、その問題に印を付けるように依頼したが、実際印を付けた協力者はいなかった。

参考文献

池田伸子(2009)「留学生の就職支援をするための実践的日本語教育について」『ことば・文化・コミュニケーション』 創刊号 pp. 131-142

門倉正美・筒井洋一・三宅和子(2006)『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房 pp. 10-13

神谷順子(2010)「日本における外国人留学生の就業に関する研究—大学・企業・行政との連携による就職支援の結果—」『北海学園大学学園論集』 143号 pp. 67-91

- 神崎道太郎・向井留実子・橋本智・正楽藍(2011)「ビジネス日本語教育とアカデミック・ジャパニーズ教育との比較から示唆される授業実践への手がかり」『日本語教育方法研究会誌』18(1)pp. 8-9
- 経済産業省委託調査(2015)『外国人留学生の就職及び定着状況に関する調査』pp. 1-233
- 袴田麻里(2009)「静岡県における留学生の就職意識と企業(製造業)の留学生採用意識」『静岡大学国際交流センター紀要』3号 pp. 79-93
- 重田美咲・中原郷子(2017)「中国人学部留学生の SPI の解答の傾向」『専門日本語教育研究』第 19 号 pp. 63-68
- 橋本智(2011)「ビジネス日本語とアカデミックジャパニーズの連続性について—大学におけるビジネス日本語教育の一考察—」『徳島大学国際センター紀要』pp. 1-7
- 福沢恵子(2010)『アピールポイントが見つかる！エントリーシート対策』 日経就職ナビ編集部 pp. 3-7
- 古本裕子(2010)「日本企業への就職を目指す留学生の直面する問題について—模擬試験問題から推測する筆記試験 SPI の難しさ—」『名古屋学院大学論集』第 22 巻 1 号 pp. 83-96
- 堀井恵子(2008)「留学生の就職支援のビジネス日本語に求められるものは何か」『武蔵野大学文学部紀要』9号 pp. 143-156
- 堀井恵子(2013)「留学生の就職とビジネス日本語教育の現状と課題」ウェブマガジン『留学交流』2013年10月号 VOL. 31pp. 1-10
- ユーキャン就職試験研究会(2015)『ユーキャンの SPI3 問題集』 ユーキャン自由国民社
- 李志暎(2002)「ビジネス日本語教育を考える」『言語文化と日本語教育』 2002 年 5 月 特集号 pp. 245-260

参考ウェブサイト

- アジア人材資金構想プロジェクトサポートセンター(2018年2月15日閲覧)
http://www.meti.go.jp/policy/asia_jinzai_shikin/supp.ortguide.pdf
- 株式会社ディスコホームページ(2018年2月15日閲覧)
http://www.disc.co.jp/uploads/2013/04/14_ryugakusei.pdf
- キャリアパークホームページ(2018年2月15日閲覧)
<https://careerpark.jp/employ/tag/974>
- 公益財団法人 日本漢字検定協会(2018年2月15日閲覧)
http://www.kanken.or.jp/bjt/survey_reports/data/survey_reports_report02.pdf
http://www.kanken.or.jp/bjt/survey_reports/data/survey_reports_report05.pdf
- 厚生労働省ホームページ(2018年2月15日閲覧)
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000006fdv-img/2r98520000006fghi.pdf>
- 独立行政法人日本学生支援機構ホームページ(2018年2月15日閲覧)
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14_1.pdf
http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html

資料 1

半構造化インタビュー調査質問項目リスト

1. 日本で就職しようと思った理由
2. 就職情報はどの経路を収集したのか
3. 就職できるためにどのような努力したのか
4. どの段階が最も難しいのか
5. そのために何かの対策書見たのか
(エントリーシート、SPI テスト、面接)
6. 今までどの段階で落とされたのかを教えてください。その原因は何だと考えるのか
7. 現時点での自分の日本語能力をどのように評価するのか
8. 日本での就活するのにあたって、困っていた点について
9. 日本の就職活動についてどう思うのか
10. 就職活動の段階で自分と日本人学生の間でどのような違いを感じたのか